

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

故郷の文化を 生かし 敬まい 愛する心

保 田 正 子 (宇野千代顕彰会々長)

岩国の名誉市民・国の文化功労者として讃えられた岩国市出身の作家 宇野千代が次のような言葉を遺している。

「『お国はどちらですか?』と人から聞かれると、『岩国です、あの錦帯橋の』と答えるのが私の癖である」と、又、「錦帯橋は日本一、桜も日本一、そんな岩国を故郷にもった私は日本一の幸せもの!」、さらに「故郷が私の全てである、故郷すなわち私である」と言い切っておられる。

宇野千代はこの様に数々の随筆を通じて故郷を自慢し錦帯橋の素晴らしさを全国に発信されただけでなく、自ら友人・知人を招いて岩国の案内までもなさった方である。

18才で追われる様に郷関を出たきり、凡そ50年も帰郷出来なかった宇野千代にとって、倒壊寸前の生家の修復が切羽詰った急務となった時、50年の内なる障壁は失せ、ひたすら修復に熱中し、どんどん故郷との距離が縮まった時の千代の胸中の歓びは察するに余りあるものだったろうと思われる。それからは、堰を切ったように度々故郷へ帰られる様になり、町の人々から「ようお帰りました」「お帰りなさいませ」と言葉をかけられては、素直によるこばれたのであった。

宇野千代顕彰会は、宇野千代生前の「後援会」を踏まえて、先生没(1996年:平成8年)後、「顕彰会」として1997年に発足した。この岩国に生まれた才能・宇野千代の文学を広め、功績を称え、まだ知られていない作品の研究や資料の発掘・蒐集などに当りながら、定番の年間行事4本(下記)を継続実施している。

- (1) 3月下旬:宇野千代生家並びに水西書院の淡墨桜の観桜会。
- (2) 6月10日:薄桜忌(宇野千代忌日)に菩提寺である教蓮寺で法要・墓詣りなどの後、生家などで偲ぶ話し合いなどを行う。
- (3) 7~8月:宇野千代著作中より課題本を択び、読書感想文を公募、コンクールを行う。
- (4) 11月下旬:宇野千代生誕〇〇年もみじ茶会を千代の生家中庭で開催。多くの方々の交流の場となる。



▲ 宇野千代生家の淡墨桜満開

宇野千代生家は、先生が77才の頃、1973年から1974年にかけて大修復されたが、瓦の一枚に至るまで元のままにと、完全復元にこだわり、諦めないでやり通した。いわば宇野千代が情熱をかけた工事のお蔭で今日岩国市の観光資源となって活用されるようになった。そして、先生亡きあと13回忌の節目の2008年には「登録有形文化財」として文化庁より国民的財産に認証されたのである。

生家は勿論のこと、若き日の千代を育んだ旧き岩国の風土は、方言・町名・屋号・町の催事や生活習慣などとして、「風の音」・「生きて行く私」・「水西書院の娘」などの小説の随所に見事な文章で具現的に描出されて生き残ったのである。真に宇野千代にとって岩国こそ“文学的感性を育んだ原風土”なのであった。

現在、旧岩国の観光地域（錦帯橋及び周辺一帯）には様々な碑が見られるが、宇野千代にかかわる碑も4基ほど建っている他、城下まちとよんでいる辺りには、先生の幸福の言葉を記した分厚い板盤のメッセージボードが16基も地元の有志によって建てられている。岩国を訪れる人々への宇野千代からの言葉の贈りものである。時間をかけて徒歩でメッセージボードをたどれば必ず得るものがある筈である。街の人々の多くがこれらのメッセージの二ツを空で言えるなど街ぐるみでわが岩国をガイドする愛郷心を持ちたい、育てたい、そして郷土の偉人たちを尊敬し愛してゆきたいものである。



▲ 立志の碑 岩国の偉人に学ぶ志を立てることば(立志の碑建立委員会)

街の人々の多くがこれらのメッセージの二ツを空で言えるなど街ぐるみでわが岩国をガイドする愛郷心を持ちたい、育てたい、そして郷土の偉人たちを尊敬し愛してゆきたいものである。

(2010.10.25.記)

ふるさと山口文学ギャラリー企画展を担当して

仁 田 野 茉 莉 (山口県立山口図書館資料情報課)

山口県立山口図書館にふるさと山口文学ギャラリー（以下「ギャラリー」という。）が開設されて3年目になります。「山口に関係があることを初めて知った」、「他の文学者もぜひ取り上げて欲しい」といった声が寄せられ、山口の文学を広く紹介する施設として徐々に定着してきたように思います。

ギャラリーは、常設展と企画展から成っています。やまぐち文学回廊構想推進協議会により選定されたふるさとの文学者63人のうち13人を常設展で紹介し、企画展では63人の文学者を基本に、県内各地を文学で迎える展示などを実施しています。現在、企画展では12月26日まで「金子みすゞ・林芙美子・中本たか子 ～同年に生まれた山口の女性文学者たち～」を開催中です。多くの方の御協力で開催に至ることができましたので、お礼の意味も込めて今回の展示について紹介させていただきます。

展示準備は数ヶ月前から始まりますが、今回は展示のストーリー作りに時間を費やしました。3人の共通項は、「明治36（1903）年生まれである」、「下関にゆかりがある」の2点です。しかし、みすゞは詩、芙美子は小説、たか子はプロレタリア文学、と分野が異なり、没年もかなり差があります。どうしたら共通項を反映させた展示ができるか悩みました。その頃、山口県立大学の加藤禎行氏に相談する機会を得ることができました。そして、共通項から離れて社会に出る頃に目を向けてはどうかというアドバイスをいただきました。それは大正末期、女性の社会進出が始まり、「職業婦人」という言葉が流行した頃です。

それぞれの人生に注目すると、同じ年・地域に生まれながら全く異なる生き方をした3人の姿が見えてきます。「赤い鳥」が刊行され、児童文芸が盛んになる頃、みすゞは投稿詩人として大いに活躍しました。職業婦人が台頭した頃、美美子もその一員で職を転々とし、戦時下では従軍記者となって情勢を伝えました。人々が過酷な労働にあえぐ頃、たか子は民衆と共に闘い、戦後は平和運動を推進しました。彼女たちは、当時の女性の生き方を端的に表すモデルとも言えます。そこで展示の中心を、個々の経歴、著作の出版状況および社会情勢をまとめた年表にしました。人生の転期、活躍した時期、悩んだ時期など、様々な視点で3人の人生を追体験していただけたらと思います。



ギャラリーの展示は、県内外の個人、団体の協力なくしてはできないことです。今回は、田中絹代ぶんか館、中本たか子文学資料館、山口県立大学、元島祥次氏、和田健氏から貴重な資料を御提供いただきました。また、多くの方に御協力、御助言を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。

さて、1903年生まれに関して、一つ付け加えさせていただきたいことがあります。実は、山口県立山口図書館も同年に誕生したのです。前後して、宇野千代や中原中也ら、山口を代表する文学者が多く誕生しています。ふるさとと共に歩んできた山口県立山口図書館で、同郷の文学者たちに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

寄贈図書 (2010年5月～2010年10月)

河野頼人『アカシヤの大連』(東京四季出版、2008年)・河野頼人『紙魚の宿』(溪水社)・山口県『山口県史・資料編民俗1』(山口県、2002年)・山口県『山口県史・資料編民俗2』(山口県、2006年)・『山口県史・民俗編』(山口県、2010年)・河野悦子『句集 時雨傘』(やまびこ出版、2010年)・赤松蕙子『句集 月幽』(角川書店、1988年)・白石藤水『句集 記念樹』(1995年)・市原あつし『平成俳句選集I - 1冬田』(牧羊社、1993年)・橘美泉『句集 十三夜』(やまびこ出版、2010年)

寄贈雑誌 (2010年5月～2010年10月)

『木の実』695号、701号(木の実発行所)・『あらつち』657-662号(あらつち社)・『ほうふ図書館だより』No.257-262(防府市立防府図書館)・『其桃』758-790号(其桃発行所)・『文芸山口』第291-293号(山口文芸懇話会)・『郷土資料新着ニュース』No.45、46、47(山口県立山口図書館)・『佐波の里 防府史談会会誌』第38号(防府史談会)・『シュリンプ』第10号(しゅりんぷ詩舎)・『自由律俳句「群妙」』5-7巻(自由律俳句クラブ「群妙」)・『颯』84号(颯事務局)・『ふるさと紀行』平成22年夏の号、秋の号【第122号、第123号】(ふるさと紀行編集部)・『大内文化探訪会』第28号(大内文化探訪会)・『図書館年報』平成21年度【2009】(防府市立防府図書館)・『山彦』VOL.99、100・『火山群』49号(岩国文化協会)・『風響樹』VOL.39(風響樹同人)・『合同年刊句集すばる』vol.45(すばる俳句会)

編集後記

▼センターだより16号をお届けします。▼今号は、巻頭に宇野千代顕彰会々長でいらっしゃる保田正子氏にご寄稿いただきました。顕彰会の精力的な活動は既によく知られているところですが、作品はもとより、宇野千代の“人としての力”がよく伝わってくる内容です。顕彰会が今後ますます発展されますことを心よりお祈り申し上げます。▼山口県立山口図書館の仁田野茉莉氏より、目下展示中のふるさと山口文学ギャラリー企画展「金子みすゞ・林芙美子・中本たか子 ～同年に生まれた山口の女性文学者たち～」(12月26日まで)のご紹介や展示に至るまでのご尽力について一文をお寄せいただきました。その一部には、本学文化創造学科の科目である「地域実習」の成果として、当センター研究員・加藤禎行の指導のもと学生たちの手による「中本たか子の文学世界」という展示も含まれております。まだご覧になっていらっしゃらない方は足をお運びくださいましたら幸いです。▼県下の顕彰会、図書館と当センターの連携が少しずつ実を結んでいると思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。▼次号は嘉村礒多の特集を予定しております。(K)



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜島3-2-1)
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2010 (平成22) 年11月30日